

木村 莊八

1893(明治26)–1958(昭和33)

樹の下に遊んでいる子供

この作品は、木村が岸田劉生とともに「草土社」というグループを結成し、デューラーやミケランジェロなど西洋のルネサンス期の巨匠たちに心酔しながら、自分なりの絵を模索しつつあった時期の作品です。木村にとっては修業時代の作品と言えますが、一木一草に生命の神秘を見るという風潮の濃かった大正時代の前期の洋画がよく現れています。

東京のとある場所の風景が描かれたものですが、切り開かれつつある森の様子や、縄跳びをして遊ぶ子供たちの姿からは、東京の変貌や風俗の変遷に関心を抱き続けた木村の志向性を見て取ることができます。